

三尾重定編輯

新編小學讀本第三上

日本教行書館			
第一室			
一	九	三	五
九	冊	架	函

Small decorative label on the spine with a circular emblem and vertical text.

福羽美静 閔
三尾重定 編

新編 小學讀本 第三

東京 教育書院藏

明治十九年三月二十三日内務省贈付



三尾重定 編
福羽美静 閔

第一

物ふいかならず。義務と以ふたや
あり。犬の夜を守り。鶏の晨と司る
ま。天然の定めなり。況や。万物のれ

新、學書院

第...

...

いと稱する。人に於てや

幼稚の時に。幼稚のつぎめあり。壯年ふして。壯年の務あり。おいて。又老たるほどの務あり。此務をなさざる者の。完全なる人といふべからず

人ニ貴賤貧富ノ別アレドモ。其家

ヲ治ルニハ。家内和合シテ。各ツノツトムル處ヲ務メザレバ。カナラズ破レ損フモノナリ。是ヲ人ノ身體ニ喻タル。オモシロキ話アリ。余汝ラニ語リキカセン。汝等ヨロシク。理會スベシ

一日。手足集會して曰。我ら終日。困

苦して得る處の食物は。亦やぐく
腹の物となる。然に腹は。安閑とし
て。亦きを食ひ。絶て我らに謝する
亦とふし。腹何ぞ無情ふるや。今よ
至い。腹のために務め勞せし。一た
び腹をして。困まらむ。慮し。とぞは
る至ける

されば。足の食堂にゆるず。手の箸
をとらず。口の食を入る亦やふく。
齒の物をかむ亦となし。目の食物
と見せ。鼻の香をか。冷。耳の食時
の報ときか。共にその務る處を
つぎめずして。徒然せして。兩三日
を過ぎけきた。身軀漸つかれて。終

に起臥する力もなきに至れり。故
よ。腹以まご疲まざるよ。手足まづ
衰へたるといふ

愚あるか。手足等の活き。心腹
の司る志を^し知^らずして。かくの如
き不平を發し。恨む處の腹よるも
己ら^らなきに。衰弱せり

汝ら。此理ヲ悟ル^レアラバ。我身ノ
教育ニ苦勞シ給フ。父母及師匠ヲ
バ。決シテ怨ミ侮ル^レ勿レ

第二

郊外ふいかに。雨ふる里來れり
行人の東西ふ迷ひ。南北よさわぎ
走れり。中に。一群の童子あまて。樹

陰に集り。靜に雨を。さけ居多り
たれい。學校の生徒ふして。今日た
まく休暇なるを以て。師は從ひて。
遊歩に出たるなり

教師童子をかへりみて曰むかし。
太田道灌と以ひ一人狩よいで。今
日の如く。雨は値て。歌をよみたり。

其歌すたぶる秀逸ふり
て。今も猶たまを賞せ
り。我も亦ふかく
感嘆するをゆ
ゑに。汝等の
騒ぐと宥めて。茲よ
あり。此雨ながくは降る屋からば。



志ばらくに志て。歌むべしとて。彼
歌を吟誦し。其意を諭しなせして。
あまけるま。果志て陰雲漸おさほ
り。洗ふお如き。天色といなまたり
り。その歌ハ。以そがほ。濡きざ
らましを。旅人の。あまよまはる。
野路のむらさめ

汝等。コノ歌ノコ、口ヲ意ニ記シ
テ。不慮ノコトニ遇フト雖。ミダリ
ニ騒ギ。惑フコト勿レ

第三

兄弟の娘あり。姉ハ十歳にして。妹
ハ七歳まなまたり
姉ハ。天性順良にして。其才も亦。ま

ぐれた。妹をかりし。まき生れなき
ごえ。さすがに幼児のまきなるゆ
ゑに。やゝもまきを危きまきをま
まきに至れり

一日。學校よりかへるみちよて。石
につまづき倒きたるはづみに。か
かへ持とる書物を。傍なるほりの

中へ。なげ入れまば。大にあわて、
まきを取んとす

姉おぞろきて。其袂をとらへ。誰よ。
心を志り免て。我言をまきけ。書物の
固に大切なる物なきごえ。人の命
まいかへがたし。まきの濠は。深くし
て。大人まきら。容易く此まき入るまき

を得ず。まゝしてや。少女の分を以て。何とて書物を取らざるを得んや。家にかへらむ。妻よく父母に請て。彼書を求め得さす。願ふ。今よ。至後。かゝる事ありと。能々我身を省みて。決して。危き所業をなさず。と諭し。けき。を。よ。里か

こき。少女なまを。忽ち。て。その理。服。悦び。以。さ。みて。家。にかへれり。

此所ハ。裁縫場ナリ。アマタノ少女。ナラビ坐シテ。裁ヲ縫ヒセリ。一人ノ男兒ハ。器械ニヨリテ。縁ヲ又ヒ。今一人ハ。ヒノシヲカケ居レ

リ
凡、衣服ノ裁縫ハ。女子ノ身ニトリ
テハ。缺クベカラザル業ナレバ。夕
トヒ其身。トミ榮エテ。親ラ此ワザ
ヲナサズトモ。必コレヲ習ヒオク
ベシ。モシ此道ニクラキ時ハ。不便
ナルト多カルベシ

マシテヤ。貧家ニ生ル、女子ハ。第
一ニ務メ學ビテ。生涯ワスレ。失フ
コト勿レ

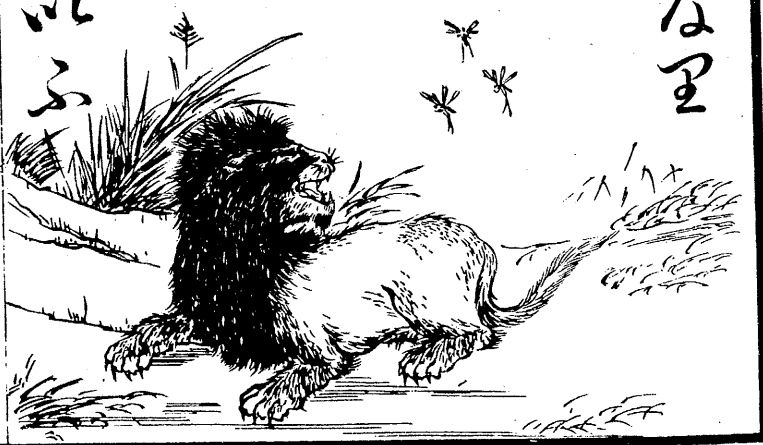
第四

人ふいかならば。長むる所と。長ぜ
ざるは。志あり。我レその一事に達
す。と。毛。他人を見くだし。悔るべし

らず

志、に。獅子と蚊と。勝負を争ひこ
るをか。しき話あり。或とき。蚊。志、
にむるひて。君ハ勇猛ふして。天下
に敵なし。故にけ毛の、中の。王家
りと以へり。然ども。吾よ里。志、れを
看るとき。ハ。智恵ふぶくして。わお

何ひ手ふハ。足さるな里
と以へむ。獅子。笑て
志、る。とせ。故
ハ蚊。くちばし
を尖らして。吾言
を信ぜざれを。請志
れと志、る。みよと。以ふ



ホ、に至て。獅子。奮然せしめて。大に
以か里。汝なんぞ。身よえ應ぜぬ。大
言を以だせや。いざ來れ。後悔せよ
とて。牙をならし。爪をこぎて。まぢ
かまへこり

然まじも。蚊。小ふして。勇を施まじ
とるふし。蚊。たちほち耳に以里。又

その鼻に飛び入て。志ばくまきを
刺し多れむ。獅子。頭をうぶか。耳
をかき。大息して曰。今わき始て。た
たかひひ。力にあらずして。法を得
るに在るまきを。悟里と里とて。終
に降參なした里と云

獅子のまきを。極めてよし。まきを

おのき強しとて。決して他人を。あ
ふどるまをなまき

第五

童子ヨ。汝詩ヲ作り。歌ヲ詠ム

コトヲ。知リタリヤ

以まだ志らず

然バ。汝ニ語リキカセシ

詩ニハ。五言絶句。七言絶句ナド。イ
口クナルスガタアリ。五言絶句ト
ハ。五字ヅ、。四句ヲ連ネテ。一首ト
ナシ。七言絶句トハ。七字ヅ、。四句
ヲ合テ。一首トナス
歌ハ。五もト。と七文字とを。五句あ
はせて。一首となせりその第一ハ。

新編小學讀本 第三卷 教育書院

五文字。第二ハ。七もト。第三ハ。五文字。第四ハ。七もト。第五ハ。七文字。合て三十一もトなり

第一よ里。第三までを。上の句と稱へ。第四第五を。下の句と以ふ。詩ヲ作ルコトヲ。學ブトキハ。大ニ讀書ノ助ケトナリ。歌ヲ詠ムコト

ヲ。習フ時ハ。其詞タビシクナリテ。トモニ文事ノ補ヒトナル

家を建るにハ。其地高くして。燥きたる所をえらび。又よく樹木を養ふべし。其地たかくして。かひきたる所ハ。空氣よく通ト。樹木茂里たると云。故ハ。人の心もさいやかふ

新編小學讀本 第三卷 十三 教育書院

新編 小學讀本 第三卷

新編 小學讀本

して。木のづから氣風も高く。なまゆるくまの故に。その地を擇びて。住べきなり

第六

一日。老人。童子ヲイマシメテ曰。汝ラ。ミチヲ走り回リテ。アツサニ苦ムコトアリトモ。其マ、冷水ヲバ。

ノムベカラズ。モシ渴シテ。堪ガタキ。アアラバ。シバシ木ノ蔭ナドニテ。アツサヲ消シ。シカシテ後ニ。飲ベシトイヘリ

童子去テ。公園地ニ至レリ。時に炎熱。やくお如し。傍をかへりみる。泉水あり。老松枝をたれ。古

新編 小學讀本 第十四

山學讀本 第三卷 山 教諭書院



杉日をおほひ。志た
だる。水ハ苔をうる
ほし。その清き水也。
以ふ塵をらず。童子
大に悦び。老人の誠
を毛忘れて。あくま
で水をのみた。里し

が。家にかへ里てのち。果して病を。
をきおほした。里
水ハ。動物植物ヲヤシナフニ。缺ク
ベカラザル。モノナレドモ。ソノ用
法ヲ過ツトキハ。害トナルコト。斯
ノゴトシ。此童子。老人ノ言ヲ守ラ
バ。何トテカ、ル病ヲウケンヤ。ス

新、集、賣、入 第三卷 五 教諭書院

編新
小學讀本
第三
山
教
育
書
院

ベテ教ニ背ク者ハ。福ヲ轉ジテ禍
トナスコト。唯コノ水ノ害ノこニ
ハアラザルナリ

新編 小學讀本 第三上 畢

板權免許 明治十九年
一月廿五日
刻成出版 同 年
三 月

定價金六錢五厘

編輯者 愛知縣士族 三尾重定

出版者 東京府士族 岩田富美

出版并 東京府士族 吉澤富太郎
發賣人 本所區松井町三丁目十番地

